

批判と中道

——カントの方法と仏教——

鈴木元久

カントの哲学は批判哲学ともいわれ、それは理性の批判であり、理論的・実践的・趣味能力としての広義の理性の自己吟味である。カントはまず数学・自然科学の学としての根拠を問う。つまり理論的認識の起源・範囲・妥当性を明らかにしたのち、形而上学の最大の課題である自由・不死・神の問題に進む。そこでカントはある実験を試みる。第一に理性を見るはたらきとなすはたらき、即ち理論理性と実践理性の二つのはたらきに区分する。次に恐らく一つのものと思われるものに対して、現象と物自体という二つの在り方を仮定する。前者は対象によって触発される (affiziert werden) 限り与えられるものであり、後者は単に前者の原因・根拠として思惟されるものと考えられる。実験の第三はコペルニクス転回といわれる思惟方法の転換である。つまり理論的認識は対象によって規定されるのではなく、対象が認識によって規定され

るといふ仮設である。⁽⁵⁾ さてカントは理論的認識に関して、伝統的立場である経験論と合理論のいずれにも偏らない。認識の質料が現象として経験によって与えられ、即ち対象によって触発される限り、感性の受容性 (Receptivität) を介して与えられる。その現象として与えられるということは、ア・プリオリな空間・時間として受けとられることに他ならないが、現象を認識の形式としてのカテゴリーにより自発性 (Spontaneität) の能力としての悟性が綜合統一するところに、理論的認識 (自然認識) の客観的妥当性が成立する。かかる認識は現象即ち感性によって受けとられる限りの自然に制限される。現象をこのように制限するものが、現象の根底に存し、それは物自体と考えられる。かくてカントは自由の問題に答える。自由を理論的に認識しようとする、それは不可避免的にアンチノミーに陥る。自由は決して現象として与え

られず、つまり時間において現われえないから。そこでカントは自由を理論的領域（現象界）から実践的領域（物自体界）へと移行することにより、自由を救出しようとする。「時間において規定される限りの物の現存在を、従って自然必然性の法則に従う原因性（Kausalität）を単に現象にのみ帰し、しかし自由を物自体としての同じ存在者に帰す。」即ち自然の原因性は現象にのみ関わり、物自体には適用しえないのである。それ故カントは自由を理性において見出そうとする。何故なら「一つの単なる可想的能力としての純粹理性は、時間形式に、従って時間継起の条件に従わない」⁽⁸⁾から。すると感性的条件（時間形式）に従わず、みずからはたらしき（自発性）をなすのは、人間にとって理性のはたらしき以外にはない。というのは理性自身は現象ではなく、時間的継起に従わないが故に、時間において現象を規定する自然法則を理性に適用することはできない。⁽⁹⁾すると理性が自由であるとは、感性的条件に一切無関係であることを意味し、「見る」理論理性の立場ではなく、実践理性（意志）として、意志の自己規定として行為をみずから始めるはたらしきを意味する。即ち理性は意志に命令する（触発する）ことによって、行為を自発的に生じせしめる原因・根拠として考えられる。しかし、結果としての行為は現象として時間において生じるのであり、自然法則をそれに適用しうるのである。それ故現象の根拠に存し、現象の原因・根拠として考えられる物自体は、対象（行為）を現象として実現するところ

の原因・根拠としての理性のはたらしきそのものと考えられないであろうか。何故なら理性（実践）は意志規定において行為（現象）を産み出す原因・根拠と考えられ、即ち現象界に自発的（能動的）にはたらしきかける（触発する）能力と考えられるから。このような物自体と考えられる理性のはたらしきを通して、人間は現象界の一員であると同時に、物自体界（可想界）の一員であることを意識（自覚）しうるのである。カントは言う、「人間は全自然を単に感官によってのみ知るが、また自己自身を単なる統覚によっても、しかも感官の印象に数えられない行為や内的規定において認識する。そして人間は勿論みずから一方においてフェノメンであるが、他方即ちある能力に関して、ある単なる可想的（intelligibel）対象である。何故なら人間の行為は感性の受容性に全く数えられないから。我々はこの能力を悟性や理性と名づける」と。かくて自由は理性のはたらしきの中において見出され、行為の主観即ち実践理性の意志規定において、その实在性（実践的）を得る。実践理性が意志規定に際し、時間的條件（感性的なもの）に関わることなく、みずからに道徳的法則を与え、この法則に従つてのみ行為せんとするところに、自由が開示されるのである。⁽¹³⁾カントは自由と自然というアンチノミーを、後者に現象界、前者に物自体界という存在領域をあてがうことにより回避し、さらに自由を道徳的法則を介し、実践的であるが客観的实在性を与えたのである。さらに不死・神は自由に基づいて要請される。

カントは理論と実践（理論理性と実践理性）、さらに現象と物自体という二側面において、自由と自然（必然）という相対立するものが、矛盾なく調和しうることを、人間の諸能力の批判を通して明らかにした。それは否定によってではなく、両者に個々の領域を与え、矛盾を取り除いたのである。このようなことこそ、カントのとった方法の重要な一つではなからうか。つまり相対立する二極が、一なる人間のうちに存すると考えることによって、矛盾は解消される。カントは言う、「自由としての原因性と自然機構としてのそれとの綜合は、——その第一のものは道徳的法則によって、また第二のものは自然法則によって同一の主観において、即ち人間の中に確立している——人間を第一のものに關しては存在者自体として、第二のものに關しては、現象として、前者を純粹意識において、後者を經驗的意識において表象することなくしては不可能である。」⁽¹⁴⁾このようにカントは両極に偏ることなく、その中間の立場をとる。しかしそれは両者からの絶対的分離・独立を意味するのではなく、両者の綜合・統一の立場であると考えられる。またこれは数学的な中間点を意味するものでもなく、両極のうちの一方に執着することを排し、両者を包含しつつある一なる全体ともいうべき立場と考えられる。このような思维方法・立場こそ、批判といわれるものであり、批判的方法と呼ばれ、まさにカントの方法は三渡幸雄博士の御指摘のように「中道」⁽¹⁵⁾と考えられるのではなからうか。

「どこで仏教においても「中道」ということがいわれる。それは釈尊が成道したのち、最初の説法といわれる『初転法輪經』⁽¹⁶⁾において説かれている。釈尊は愛欲（樂）と苦行（苦）という二つの極端から離れ、それを捨て去り、中道を悟られたのである。宮本博士によれば、それは釈尊自らの「証悟の方法」であり、その「生活の体験」が説かれたものである。⁽¹⁷⁾そして中道とは八正道といわれ、「苦の滅尽にいたる道」——道諦即ち涅槃への道として説かれる。つまりそれは現実における苦—樂という対立する両極を離れ、そのいずれにも偏ることなく、正しく見・考え・語り……等々の「正しく生きる」という道であり、苦なる現実から聖なる理想への正しい道である。このように中道とは対立する極端を離れた正しい道・方法であると考えられる。また釈尊は説く、「正しい智慧」によってものごとを見ることを、そしてかかる正見によってももの正しいありようの智が生じることを。そして釈尊は有・無の二辺を離れた、即ち「すべては有である」「すべては無である」という両極を離れて、真理を「中によって」(Majjhima) 説く。宮本博士はこの「中によって法を説く」というところに、中道が批判的方法であると指摘する。⁽¹⁸⁾つまり批判的方法としての中道とは、感覺的に制約されたものに執着することなく、正しい智慧によって縁起に基づいて生起するものありようを正しく把握する方法であると考えられる。それ故中道とは、感覺的なものにとらわれた我に依存することなく、中によって即ち八正

道に実践的立脚点をもつ自由な立場において、ものを見る方法といえるのではなからうか。

また仏教では我を否定する無我論の立場にたつ。我は常一主宰ともいわれ、不変不動な実体的なものをいうのであるから、二辺に固執する立場は有我論といえよう。『法句経』において、『あらゆるものごと(諸法)は無我なり』と教智にて悟る時、苦惱を厭う心おこる。これ清淨にいたる道なり」と説かれる。このように仏教においては、それは理論的にのみ否定されるに留まるのではなく、その否定によって苦から離れるという実践を目的としている。では否定される我とは、どのようなものであろうか。『テーラ・ガーター』において、五蘊は苦であり、無常であり、空であり、無我であると説かれている。無我なる五蘊に我を認め、それを欲望の対象として執着することを、釈尊は諫める。つまり我であらざるものを我とみなすことを否定するのである。ところで我の原語は *aham, atan* であり、無我は *anaham, anatan* である。中村博士は最初期の仏教では、客体的に把握しえないものは、アートマンならざるもの—非我であり、アートマンそのものの存在は否定せず、このような形而上学の問題は避けられていると述べられている。アートマンはウパニシャッド哲学において元来呼吸を意味し、それが生命活動の中心的な力—靈魂を意味するようになり、さらに外界に対する自我や万物に内在する靈妙な力—その本体を示すようになった。⁽²⁰⁾そしてさらに自己の統一原理としての

アートマンは宇宙の統一原理であるブラフマンと同一であるとなさされていったのである。つまりアートマンは形而上学的実体・本体とされていたのである。しかし釈尊はかかる形而上学の問題に対しては、「無記」をもって答え、形而上学的実体としてのアートマンを肯定も否定もせず、アートマンでありえないものをアートマンとみなすことを否定したのである。釈尊以前においては、常住不変な固定原理としてのアートマンが、人間の靈魂の中に主宰者となって存在し、アートマンが宇宙の究極の原理・本体としての絶対者なるブラフマンと同一なることを智ることが、理想と考えられていたが、釈尊はこのようなアートマンの認識を拒否し、真実なる自己を求め、実践せんとしたのである。それ故釈尊がバラモンの有我論に対立する無我論を説くのは、有我論に対立する無我論ではなく、常一主宰的な実体としての我を、つまりものを絶対視する立場を否定し、理想へと向かう実践をめざすものであり、無我の立場は中道の立場を開くものである。このように一つのものに固執し、絶対視する立場を否定し、それらから離れ、偈りへと向かう立場こそ、中道といわれるものであり、釈尊の立場であると考えられる。

このようにカントの批判も、仏教も全く異なった極端に偏することなく、「中」にその立脚点をもつ。カントは自然と自由を否定することなく、各々の原理を導出し、両者の調和・統一を見出す。すなわちカントは理論理性と実践理性の両者を公平に認めた。

するとカントが理論哲学において現実の分析を通じ、それを原理化・体系化しようとするいわゆる先験的(超越論的)方法は、肯定的・原理化的方法といえるものであり、それは自然の理解に向く知の立場であるといえよう。それに対し釈尊は現実の分析より、それを苦・無常・無我と否定的にとらえ、かかる否定の上でたゞ、苦—楽・有—無・有我—無我という二つの極端への執着を否定し、より正しい、より真なるものへと志向するのは、内なる心に向く智の立場である。釈尊はインド人特有の思惟方法としての否定的表現によって中道の立場にたち、普遍的な心の道をめざしたのである。また中村博士によれば、釈尊にとって道徳成立の根拠の問題に答えることは問題とならなかつた。つまり釈尊は倫理の実践者であつたが、倫理学者ではなく、善の実現をめざしたのであつて、道徳理論の体系化は彼の関心外であつたと述べられてゐる⁽²⁸⁾。それに対しカントは哲学者・形而上学者であつたが、実践者ではなく、その原理化・体系化が彼の関心の中心をなしていたといえるであらう。カントのめざすものは、客観的・学問的原理(知識)であるが、釈尊のそれは主體的・自覚的智慧(悟り)である。しかしそのめざすところに相違はあるが、両者の思想に存する、その中道としての方法・立場(態度)において、相通じ接近するものが考えられないであらうか。ここにわれわれは両者の對話の道が開かれるのではなからうかと考えるのである。

(一) Kant: Kritik der reinen Vernunft, B.7. (以下 K. d. r. V. と

略す)

- (2) K. d. r. V. IX-X.
- (3) K. d. r. V. XXVII, XXI. Anm.
- (4) K. d. r. V. XXVI.
- (5) K. d. r. V. XVI~XVIII.
- (6) Kant: Kritik der praktischen Vernunft, A.170. (以下 K. d. p. V. と略す)
- (7) K. d. p. V. A.169.
- (8) K. d. r. V. B.580.
- (9) K. d. r. V. B.581.
- (10) 第一批判と第二批判における物自体は、少なからず相違があると考へられる。前者は主観の外なる存在者(即ち形相と質料よりなる)を意味し、後者は主観の内なるもの(形相としてのみ、単にはたらくとして)を意味し、両者はアナログアの関係にあると考へられ⁽²⁹⁾。ここでいう物自体は後者の意味である。
- (11) K. d. p. V. A.190.
- (12) K. d. r. V. B.574-5.
- (13) 自由は先験的自由と実践的自由の二種があるといわれる。前者は消極的には感性的制約からの独立(超越)、積極的には出来事の系列の始まり(自発性)を意味し、後者は自然(感性的なもの)からの独立、さらに道徳的立法と考へられる。
- (14) K. d. p. V. A.10. Anm.
- (15) 三渡幸雄『カント批判哲学の構造』(日本学術振興会)参照。
- (16) 増谷文雄『阿含經典』(筑摩書房)第三卷、二五五—二五六ページ。同様なことが、同書一二四ページにも説かれている。
- (17) 宮本正尊『根本中と空』(第一書房)一五一—一五六ページ。
- (18) 増谷文雄『前掲書』第一卷、二二—二三ページ。
- (19) 宮本正尊『前掲書』二〇ページ。

- (20) 『法句經』(渡辺照宏著作集第五卷、筑摩書房)二七九ページ。
- (21) 『テラ・ガーター』(『原始仏典』筑摩書房、早島鏡正訳)一一一—一一九。また同様なことを『阿含経』(増谷文雄、前掲書、第二卷、二六ページ)にも見ることが出来る。
- (22) 『自我と無我』(平楽寺書店)中村元「インド思想一般から見た無我思想」五七—五九ページ。
- (23) 金倉田照『インド哲学史』(平楽寺書店)二七ページ。
- (24) 『東西思维形態の比較研究』(東京書籍)北条賢三「インド的思维形態の特質」一一八—二〇ページ。
- (25) 中村元、前掲書、三七—三八ページ。
- (すずき・もとひさ、西洋哲学、大正大学大学院)